

編集後記

二〇一六年・冬「水源地」第一号完成。そこに編集子からの

のブログが張り付けてあります。われら三人寄つても文殊の知恵にはならないが、還暦過ぎてお互いつくづく顔を見合わせ、戦友という言葉、戦中派だけのものでないこと身にしました。なにをやってきたんだ。結局は【遊び】だったろう。仕事も学問も熟睡するの遊び。味わい深い宝物は、今まで出会ってきた人たち。■それから八年の歳月。出会った人たちも古希の顔。「水源地」第六号、デジタル版完成。これも自立しているお二人の努力のたまものです。すなわち吉澤編集長と村野副編集長。みなさん、「ご苦労様」と声をかけます。■こちらは発行者の名前を貸して相変わらぬの熟睡でした。それでも友人。まあ、またまたお許しのほどを。(粕谷)

☆☆☆☆

ウクライナでの戦争が止まないのに昨年十月の中東イ・パ紛争、直近の露国の大統領選と首都近郊の銃撃テロと(更に日本の諸事件も含め)憂鬱だ。啄木歌集から「ホン」「フミ」の歌を挙げ、今は桜でも眺めて居たい。■その昔読みしことある小説に書かれし如く帰る路(みち)かな■亡くなりし師がその昔賜(たま)ひたる地理の本など取り出でて見る■囊(みざれ)降る石狩の野の汽車に読みしツルゲエネフの物語かな■耳搔(か)けばいと心地よし耳を搔くクロポトキン

の書(ふみ)を読みつゝ■赤紙の表紙手擦(てず)れし国禁の書(ふみ)読みふけり夏の夜を寝ず■書(ふみ)よめば書のなかより路(みち)ゆけば路の上より可笑(をか)し)さ来(きた)る■新しき本を買ひ来て読む夜半(よは)のその楽しさを長く忘れぬ■そを読めば愁知るといふ書(ふみ)焚(た)ける古人(いにしへびと)の心よろしき■蘇峰(そほう)の書(しよ)われに薦(すす)めし友はやく校(かう)をしりぞきぬ貧しさのため■うつとりと本の挿絵にながめ入る安き心をひとり嬉しむ■寝つつ読む本の重さにつかれたる、手を休めては、物を思へり■地図の上朝鮮国にくるぐると墨をぬりつゝ秋風を聴く。(村野)

☆☆☆☆

編集作業の最中、この「後記」に辿り着くまでに、毎回、作業中の原稿をほっぽり出そうかと思うことが多々ある。WORDの書式設定にガチガチに固められて、当方にはほとんど手の付けられない原稿だ。これにはほとほと参る。■とりあえず今回も力業で乗り切った。後には心地よい疲労感と充足感がひたひたと満ちてくる。この編集という作業、隠居した暇な老人には貴重な活力剤になっているのかもしれない。■次号は半年後の十月半ば発行予定。それまではまた普通のクソジジイに戻って、毎日徘徊(散歩)と昼寝と飲酒の怠惰な日々を過ごすことになる。■それにしても締切から数日で編集完了と自画自賛。スゴイ!。(吉澤)

水源地 第六号

発行 二〇二四年四月一六日

編集 水源地編集委員会

発行者 粕谷 隆夫

〒三〇〇―二七四一

茨城県常総市国生一三八〇番地

電話 〇二九七―四二一〇六二五